

最優秀賞

神奈川県社会福祉協議会会長賞

「心が通じたコミュニケーション」

小田原市立大窪小学校

五年 神田和志

僕の母は、病気の人の家で介護をする「訪問介護」の仕事をしている。ある時、母が「今日は利用者さんと口文字を使ってお話ができたんだよ。」とうれしそうに話をしてくれた。その時、僕は初めてALSという病気や、「口文字」のことを知った。

ALSという病気は、病気になって数年で全身の筋肉が動かなくなり、寝たきりになったり、声を出すこともできなくなる病気だ。声も出せなくなった人は、口文字を使ってやりとりすると母が教えてくれた。僕もやってみたいと思い、母からやり方を教わった。口文字は、口の形でまず母音が何かを判断して、次に相手の瞬きでどの文字なのかを特定するそうだ。最初のうち、僕はすぐに声に出してしまい、母に「声は使えないんだよ。」と言われてしまう

やさしかった。

口文字のやり方に慣れると、実際にその利用者さんと会ってお話したいと思うようになった。そこで、僕は手紙と白鳥のイラストを書き、母に渡してもらった。「手紙を見せたら、笑顔でともうれしそうだったよ。」と母が教えてくれたのがうれしくて、僕はやはりこの人に会ってみたい、と思った。そこで、七月の終わりに、利用者さんも参加する、障がい者との交流会に参加した。会場にいる利用者さんは、大きな車椅子に乗って、普通に座っている人のように見えた。近くへ行くと僕の顔を見てニコニコしてくれたけれど、やはり声は出せないようだった。僕は何かやりとりしたくて、「好きな芸能人は誰ですか」と聞いた。「や・ぎ・わ・え・い・き・ち」と、いうのが答えだった。僕はその答えを解読するのに、十〇分位かかってしまった。それでもお互いに言葉が繋がって、利用者さんがうれしそうに笑った時、僕もとても嬉しくて、直接お話ができて良かったと思った。